

【佳作】

或いは咲かない花だとしても

国際日本学部 国際文化交流学科3年 安部川 欧

玄関の扉を押すと、まるでご飯が炊けたばかりの炊飯器を開けた時のように、ムワッと湿ったコンクリートの匂いが鼻孔の奥をくすぐった。まったく、昨晩から明け方まで続いた大雨のせいで、見える世界は一面「ねずみ色」。慣れない正装に包まった私は、寝不足だった。

こういう匂いを、ギリシャ語で「ペトリコール」というらしい。昔、授業中に国語辞典でたまたまこの単語が載っていたページを開いたことがあった。昨日の夜に何を食べたかなんてことはすぐに忘れてしまうのに、そういう偶然の一瞬は、人間なかなか忘れられないものなんだと思う。多分、人生なんて、こういう「たまたま」の積み重ねなんだろう。

それに、私はこういう匂いの方が、教室の匂いより好きだった。制汗剤の匂いは「水色」、砂ほこりの匂いは「黄土色」、汗の匂いは……

——もし、そこに生ゴミのような匂いの人間がいるならば、私はきつとまた言ってしまうような気がする。「ねえ、もしかして何か、嫌なことでもあったの？」って。

文香はとても、綺麗だった。携帯にはストラップ一つ付いてないし、上履きだってデコってない。化粧も薄いしスカートも常に長い。けれど、肌は真っ白くて、いつも洋服の襟は立っていて、ピアノを弾く指はまるで絹で出来ているように細くて、ふんわりとした花のような香りがした。いくなれば「桜色」。私とは真反対で、ザ・お嬢様って感じの子。私と文香は、隣の席になったこともないし、部活が一緒でもない。土日にどこかへ遊びに行ったこともないし、お互いの家はおろかお互いの誕生日すらうる覚えだった。

傍から見れば「友達」かどうか怪しく感じるかもしれないけれど、それでも私たちは同じ教室にいる時は毎日飽きるほど会話をしていた。テレビで試合を見ていたお父さんが前に、「ボクシングは拳だけで分かり合うもんなんだよ」と私に得意げに話したことがあったけれど、今の私たちの関係性を一言でいうならば、そんな「名もなさ」が一番しっくりきた。

ちやうど今日みたいに、明け方まで雨が続いた日、私はいつもより早く目が覚めてしまった。普段遅刻ギリギリの私にとってこれは、一年に一回

と無いチャンスだと思って、教室に一番ノリしてやろうと意気揚々と家を出た。教室がある階に着くと、どこからか水を流している音がする。不思議に思いながら教室へ向かうと、そこには文香が一人で花瓶の水を変えている姿があった。

「え、どうしたの、こんな時間に……」と、夜中にくっそりリビングで映画を見ていたら、寝かしつけたはずの子供が突然起きて驚いた時の親のようなことを言うから、

「いやさ、早起きしちゃって、一番乗りで学校に来てみようと思ったら、文香がいたからびっくりしちゃったよ」と返した。

「いつもこうやって朝イチバンに教室に来て花瓶の水を変えたり、水道のところのゴミの片付けをしたりしてくれてるの？」と聞いた時に気が付いた。文香の目は、少し赤みを帯びていた。

「ゴミは、うちは何もしてないけど……。お花は誰かが水を変えないと枯れちゃうじゃん。それにね、この花、お母さんが好きだった花だから」と、少し微笑んだ彼女に私は、「大丈夫？」と声をかけた。ほんの少しだけ黙った後に彼女は「うん、大丈夫」と一言だけ私の目をまっすぐ見て呟き、

「ちょっとトイレ行つてくんね」と花瓶を自分の机の上に置いた後、教室を出ていった。

文香はとても、綺麗だった。八重歯があつて、品もあつて、けれど教室を丸く掃くような男らしさもあつて、白肌が際立つような「漆黑」に遮蔽された彼女は、生ゴミの香りがした。

後日分かったことで、「私が理解できたこと」は、文香が父親からひどい虐待を受けていて背中に大きなアザがいくつもあつたことと、どうやら私は、他人の匂いが感情的に「色」として分かるようになったことだけだった。

葬儀の取り仕切りは、全て文香の祖母が行った。私が、棺桶の小窓から文香の顔を見るか見ないか迷っていたら、

「ふみちゃんはねえ、学校に行く前にうちに必ず寄つて、丁寧にお化粧してから学校へ行くのよ。まるで、好きな子のためにお洒落をしているみたいでねえ」

と、背中からしゃがれた、優しい声がした。私の肩をそつと抱いて、自分の方に振り向かせてから、「あの子、今日はまだ寝ちゃつてるみたいだから」と私にそつと呟いた。「それにね、あなたに持っていて欲しいものがあるの」と言うのと、一冊のノートを差し出してきた。

「ここにね、いつもふみちゃんが話してくれるお友達の名前があつて、その人に会ったら渡そうと思つていたの——たぶん、あなたのことよね？きつ」と言つた。彼女からはずつと、石鹸の匂いがしていた。淡い純白が、彼女を包んでいた。

そのノートには確かに私の名前が書かれた付箋が途中のページから飛び出っていて、そこを開くと、

「ぼくぼくひとりでついていた わたしのまりをひよいと あなたになげたくなるように ひよいと あなたがかえしてくれるように そんなふうになんでもいつたらなあ」

という詩が一節だけ書いてあつた。ああ、ここには文香がいた証拠がある。ここには文香の「色」がある。なんだか私は、少し腑抜けてしまった。文香は私に何を残そうとしていたのだろうか、そんなことを考えては、より文香のことで頭がいっぱいになってしまった。

ノートを閉じようとしたときに、するつと何かが落ちた。拾い上げたそれは、きれいなピンク色をした花を、押し花にした葉だった。よく見ると、文香が花瓶の水を変えていたあの花だった。「この花、なんて言うんですか？」と文香のおばあちゃんに聞くと、

「それはね、胡蝶蘭よ。ふみちゃんが昔から一番お気に入りの花なのよ」と教えてくれた。

葉を鼻に近づけると、ふんわりと文香の匂いが、私の鼻孔をくすぐるような気がした。

【参考資料（詩の引用）】

八木重吉 『鞠とぶりの独楽』

コメント

初めまして、読んでいただいた方は、ありがとうございます。この作品は、今年の前学期のゼミナル活動の一環で作成いたしました。

コロナウイルスが一番蔓延していた時に私は本学へ入学して、思い描いていたような大学生活を送ることは叶いませんでした。それは、私だけではなく、思い出作りがなくなってしまう学生全てがそうならなかったはず。また、中には、愛する人なども失わなければならなかった人もいます。

そういつた、どこへぶつければ良いのか分からないもどかしさを、今回は表現したつもりです。人の感情が匂いとして、色になって見える主人公は、これからもさぞかし人より辛い人生や経験をするでしょう。でもそれは、持っているモノや置かれている環境はちがくとも、今回被災した私たちと、通ずるところもあると私は思います。

主人公の名前を書いていないのは、読んでいただいたあなたに、寄り添いたかったからです。おこがしくも、この作品が読んでいただいた方の心を慰められるようになれば、私としては幸いです。